

鹿児島県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会 歴史分科会県大会 研究授業
地歴公民科（日本史B）学習指導案

日 時：令和元年10月18日(木) 3校時
実施学級：加治木高等学校2年2，4組（選択者35人）
授 業 者：梶原 武

1 単元

第2章 律令国家の形成 3節 平城京の時代 「藤原氏の進出と政界の動揺」

2 目標

前時において生徒は、奈良時代が皇親勢力と藤原氏の政権をめぐる抗争の時代であったことを学んだ。このあと藤原氏は、外戚政策を進めながら他の貴族たちを退け、摂政・関白の地位を利用して政治の実権を握る。

中学校時代に学んだ摂関政治の理解も含め、生徒は藤原氏にどのようなイメージを抱いているだろうか。大概の生徒はマイナスにとらえているのではあるまいか。

本時は、2006年度に東京大学の二次試験（日本史）で出題された第一問を素材にする。素材文を丁寧に読み込み、アクティブ・ラーニング（シンク・ペア・シェア）を取り入れながら、藤原氏を多角的に多面的に理解させたい。



研究授業の様子（撮影：宮原義文教頭）

3 授業の流れ（ワークシートに従って授業を展開）

【導入…前時の復習】（7分）

教科書・ノート・図説を使いながら、奈良時代がどのような時代であったか、一文で表現。

問1

奈良時代は…

時代であった。

【展開】（40分）

ア 自分が持っている藤原氏の知識やイメージを、一文で表現。

問2A

藤原氏は…

であった。

イ 設問を理解する。

問3 ①～④の文章を読んで、下記の設問に答えよ。

奈良時代は、古くからの豪族を代表する「大伴的」なものと新しい「藤原的」なものが対立していたとする見方がある。律令制にはそれ以前の氏族制を継承する面と新しい面があることに注目して、奈良時代の政治と貴族のありかたについて、180字で説明しなさい。

ウ 条件文①～④を読んで考察、他者と議論を深める。

- ① 律令制では、官人は能力に応じて位階が進む仕組みだったが、五位以上は貴族とされて、様々な特権をもち、地方の豪族が五位に昇って中央で活躍することは多くはなかった。
- ② 藤原不比等の長男武智麻呂は、701年に初めての任官で内舍人（天皇に仕える官僚の見習い）となったが、周囲には良家の嫡男として地位が低すぎるという声もあった。彼は学問にも力を注ぎ、右大臣にまで昇った。
- ③ 太政官で政治を議する公卿には、同一氏族から一人が出ることが一般的だった。それに対して藤原氏は、武智麻呂・房前など兄弟四人が同時に公卿の地位に昇り、それまでの慣例を破った。
- ④ 大伴家持は、749年、大伴氏などの天皇への奉仕をたたえた聖武天皇の詔書に感激して長歌を詠み、大伴氏の氏人に、先祖以来の軍事氏族としての伝統を受け継いで、結束して天皇の護衛に励もうと呼びかけた。

エ ウでの考察をもとに、藤原氏のイメージを再考、他者と共有。問2のBに記入する。

問2 B

藤原氏は…

であった。

【まとめ】（3分） 本時を振り返り、用紙に記入・回収、次時の予告

4 生徒の感想（一部）

- a 藤原氏に対するイメージが授業を受ける前と後で少し変わった。
伝統として固定されているものを変えるのはむずかしいと思うので、
すごいと思った。

- b 大伴的なものとは中央の有力豪族を特権とし、
昔からの伝統を守るのに対して藤原的のものは、
自力に依りて位階を登るのた」ということを知るこ
ろになってきた。
- c 初期の頃の藤原氏は、これまでのシステムにとらわれずに、
政権をにぎろうとした人だと思った。
- d 問題文を読んだときは意味が分からなかった
けど、授業が進むにあたって分かっていくのがとても
楽しかった。
- e 難しい内容だったが、1つ1つ読み解くうちに
理解できた。
藤原氏に良い印象はなかったが、変わった。
- f 「大伴的」とはと「藤原的」とはとの
2つのちがいがよく分かった。おもしろかった。
- g 問3は110と見質問の意味
が分からなかったが①～④
の説明で理解できた。

5 授業者の考察、今後の授業のあり方

a～cのように、大伴氏との比較、律令制度運用時の
関わりなどを通じて、「藤原氏へのイメージが変わった」
という感想。また、d～gのように、素材文を読み
進めながら理解が進み、日本史に対する興味・関心や歴



史的思考力の深まりも見られる。改めて、東京大学の二次試験における、問題の秀逸さと、その問題を十分に楽しむことの出来る、本校生徒の可能性を強く感じた。

今後の授業のなかでも、優良な大学入試問題を活用しながら、生徒の学ぶ意欲を高める工夫を重ねていきたいと思う。